## 2018

## 国語

## 注 意

- 1. 試験時間は、8:50~9:40の 50分です。
- 2. 問題は 🖯 から 宣まであります。
- 3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
- 4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
- 5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
- 6.問題についての質問はうけつけません。
- 7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

17/12/25 9:53

もクラスから仲間はずれにされるようになった。 釣ろうとしていることを知り、「ヌシ」の存在を信じ、サンペイ君と仲良くなったが、福ちゃんは「ヌシ」を認めず、 あって、全員から仲間はずれにされていた。博士はある時、小学校の裏にある瓢箪池でサンペイ君が「ヌシ」と呼んでいる大きな魚を ひそかに「サンペイ君」と呼んでいた。サンペイ君は、クラスメイトから信頼されている「福ちゃん」にほら吹きだと言われたことも 大窪博士はその名前からクラスでは「ハカセ」と呼ばれていた。クラスにいる中田利也という少年を博士は釣り好きという理由からキネメメピロペ゚゚゚ そのために博士

らごそりと小さな包みが二つ、三つ落ちた。 変化というのはいつも突然だ。二月十四日、バレンタインデーの朝、 いつものように登校して教科書を机に移そうとすると、 中か

机の中に手を入れてさぐってみると、最初に落ちたやつだけではなく十個以上はありそうだった。 チョコレートなのだ。博士は自慢じゃないけれど、これまでもらったことがなかった。それが今年に限って、いくつももらえるなんて 最初はなんのことか分からなかったけれど、すぐに理解して博士は顔が①かーっと熱くなった。きっと耳たぶの先まで赤かったに違いない。

紙の感触が指先にあって、博士はそれを引っ張り出した。封筒だった。

(大窪君と中田君はとてもがんばっていると思います。そんけいします。女子のみんなからチョコレートをおくります)

視線を上げると、小林委員長がこっちを見て、リスみたいな大きな前歯を出して笑っていた。

そういうことだったのか。女子全員が博士のことを励ましてくれたのだった。

「今年は福ちゃんにはなしだって。去年は十個以上もらっただろ。ショック大きいぜ」

だれた感じだったけど、それ以上に博士は話しかけられた、という事実に戸惑った。 斜め後ろの男子が耳打ちしてきた。えっ? と耳を疑った。博士に 1 話しかけてきたのだ。福ちゃんを見ると確かにa)

②クラスを成り立たせている力学がコトリと小さな音を立てて組み替わる。その日から、誰も博士に話しかけるのをためらわなかったし、 "あたしたちは仲間はずれをつくるような男子にはチョコあげないからね!」 小林委員長が大声で言うと、どっと笑いが起きた。

— 1 -

福ちゃんも謝りこそしなかったけれど、また以前のように博士を扱うようになった。

外を見ていた。博士はそのごわごわした後頭部を時々見ては、③胸がチクリと痛んだ すべては元通りだった。博士が、サンペイ君と親しくなる前とまったく同じ。サンペイ君は、誰とも話をせず、授業中もただずっと窓の

三月になったばかりの昼休み、博士は例によって一人で本を読んでいた。

昼休みが半分過ぎたことを告げるチャイムが鳴った時、廊下を [ 2 走る足音が聞こえてきた。

「ハカセ君、急いで来てくれないか」

息を弾ませた声に振り向くと、サンペイ君が教室の入口のところに立っていた。 突然のことで驚いたのが一番だったけれど、同時にすごくうれしくて、博士は「いいよ」と立ち上がった。

「とにかく急いで来るのだ。ハカセ君は是非見に来るべきなのだ」

ちょっとbeneが、なのに憎めない、言葉を交わさなくなる前とまったく同じサンペイ君だった。

後をついていく時、サンペイ君の服にあちこち泥がついていることに気づいた。

してあった。泥にまみれた取っ手をむんずと摑み、持ち上げると、水が飛び散るのも構わずに大きく振って博士の前に差し出した。 サンペイ君は校舎を出て、 3 ] 瓢箪池に向かった。池のほとりには釣り竿が投げ出されていて、大きなタモ網が水の中に半分浸し

博士の目は網の中に吸い寄せられた。黒っぽい銀色の魚が、木漏れ日を反射しながら力強く身をくねらせていた。

「ヌシなのだ。水がぬるんで、やっと釣れたのだ」

いつものように 【 4 】 言おうとしているけど、②どことなく声がうわずっていた。

「すごい……」博士はひとこと言って黙り込んだ。

本当にすごいと思った。サンペイ君はずっと「ヌシ」のことを話していたけれど、ここまで大きく立派なものだなんて想像していなかった。

たぶん、五十センチ近くはあるんじゃないだろうか。サンペイ君や博士の体の幅よりもずっと大きい。 ゲンゴロウブナ。たしか、そうだ。顔の後ろから背びれにかけてこんもりと盛り上がったたくましい形をしていて、なによりも大きかった。

ムが鳴っていたけれど、そのチャイムの意味さえ気がつかなかったほどだ。 サンペイ君は嘘をつかない。博士はなんだかじーんとしてしまって、その場に立ちつくした。遠くで午後の授業が始まる五分前のチャイ

ひあ、ハカセ君、そろそろいくのだ」

サンペイ君はタモ網を水に戻して、服に付いた乾いた泥を払った。

「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は ・熱のこもった口調で言った。

「そうだな。放課後まではこうしておくとして、とりあえず飼ってみるかもしれないな。 でも、 飼いきれないなら魚拓を取るのだ。こいつ

は魚拓を取るのに値するのだよ。おじさんが帰ってきたら見せなければならないのだ」

「みんなには見せないの」

「なぜ、そんな必要があるのだい。ぼくはヌシを釣っただけで満足なのだ」

博士は小さくため息をついた。⑤サンペイ君はいつもそうだ。

かったけれど、体を少し丸めるようにしてなんとか収まった。 近くに銀色のバケツが転がっていた。博士はそれで池から水をくみ取り、タモ網を上げて中にそいつを落とした。バケツはいかにも小さ

「なにをするのだね、ハカセ君」

サンペイ君が少し慌てた口調で言った。

「いいから、いいから」

⑥博士はバケツを持って走り始めた。水がちゃぷちゃぷ撥ねて指に触れ、冷たいのになぜか気持ちよかった。

サンペイ君はほら吹きじゃない。本当にすごいんだ。

心の中でつぶやきながら、ぐんぐん走った。こぼれた水は指だけじゃなく、シャツやズボンまで濡らしたけれど、それも気にならなかった。

教室の扉をガタンと開けたのは、午後の授業が始まった瞬間だった。

「大窪、どうした。遅刻だぞ。それにどうした、中田まで――」

柿崎先生の声を無視して、博士は大声を出した。

「ヌシやでー、ヌシが釣れたでー、サンペイ君が釣ったんやで」

みんながぽかんと口を開けてこっちを見ている。自分が関西弁で話しているのに気づいたけれど、それはどうでもよかった。

「ほら、みんな、見いや。でかいでえ。ほんま、でかいでえ」

「ハカセ君、やめるのだ。ぼくはこんなのは好きじゃないのだ」

そう言いながらも、サンペイ君は本気で止めようとはしなかった。どっちにしたって博士はサンペイ君の願いを聞き入れるつもりなんて

なかった。 た。

博士は教室を小走りに移動して教壇の前に立った。

「大窪、どういうつもりだ」

ゲンゴロウブナを摑みあげた。手で持つというより、体で抱え込んだ。 先生の言葉をまたも無視し、博士はバケツの口を傾けてみんなの方に向けた。それだけでは見えないと思い、バケツを床に置いて中から

どよめきが、漏れた。

「すげぇじゃん」と誰かが言い、次々に賞賛の声が上がった。魚が嫌いな女子がいて、「いやだー、やめてよ」と大声で抗議した。

でも、博士は無視した。

まっすぐ歩き、福ちゃんの前に立った。

目が合うと、福ちゃんはその場で腰を浮かせて半分だけ立ち上がった。

「な、サンペイ君はほら吹きとちゃうで」

返事はなく、ただ福ちゃんはヌシを見つめていた。

ンプし宙を舞った。 ふいにヌシが腕の中で暴れ、のけぞった博士の腕から躍り出た。福ちゃんが慌てて両腕をさしのべたけれど、それとは反対の方向にジャ

たのだった。 振り向くと、サンペイ君の腕の中で、激しく身をよじっていた。サンペイ君はいつのまにか博士の背後に立っていて、ヌシをキャッチし

博士ははっと息をのんだ。サンペイ君は口を一文字に結んで福ちゃんを見ている。

そして、やおら教室全体を見渡し、 無言のままで魚体を高々と、まるでバスプロの大会で優勝したトロフィのように掲げた。

誰も言葉を発しなかった。先生さえ、息を詰めて見つめていた。クラスの真ん中にただヌシとサンペイ君と福ちゃんがいて、コトリとも

音はせず、しんしんと時間が過ぎた。

またも元気に体をくねらせたヌシから、飛沫が散った。

⑦窓からの光が反射して、教室全体が一瞬、おひさまの金色にほーっと輝いた。

(『サンペイ君、夢を語る』川端裕人の文章による)

— 4 -

(注1) タモ網…魚を取り込むときに使う網。

(注2) 魚拓…魚の表面に墨をぬり、和紙にその形を写し取ったもの。

(注3) 柿崎先生…博士たちのクラスの担任。

(注4) やおら…落ち着いてゆっくりと動作を始める様子。

(注5)バスプロ… バス(魚の名)を釣ることを職業にしている人。

問一 波線部a~cの言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

うなだれた

元気なくうつむいた

ウ 納得できずにいらだった 突然のことにあわてた

今後のことを心配した

オ 何もできずにぼうぜんとした

相手に対する思いやりにかける態度

相手を低く見てえらそうにする態度

ウ 相手が言うことを無視する態度

b

高飛車

相手を教えさとそうとする態度

オ 相手に注意をうながそうとする態度

— 5 —

ア しかりつけるような口調 怒りを抑えきれない口調

С 熱のこもった口調

ウ 真剣で情熱をこめた口調

几帳面に問いただす口調

オ おどろきを隠せない口調

問二 空欄1~4の中に入るもっとも適当な語を次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。 淡々と イ まっすぐに ウ あわただしく エ おそるおそる オ わざわざ

問三 傍線部①「かーっと熱くなった」とありますが、この時の博士の気持ちを表す言葉として適当でないものを次の中から一つ選んで、

記号で答えなさい。

動<sup>どうよう</sup> イ 恥ずかしさ

問四

ウ くやしさ

工

照れ

才 困<sup>こ</sup>んわく

傍線部②「クラスを成り立たせている力学がコトリと小さな音を立てて組み替わる」とは具体的にどのような変化を表現したもので

今までは女子にまったく人気がなかった博士が女子の中で人気者になったという変化。

その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

クラス内での福ちゃんの絶対的な力が女子に奪われてしまったという変化。

クラスの劣位に置かれていた博士がサンペイ君とともに強力な発言権を得たという変化。

クラス全員から無視されていた博士が皆から話しかけられるようになったという変化。

小林委員長からけいべつされていた博士が逆に尊敬される存在になったという変化。

オ

ウ エ

6 –

問五 傍線部③「胸がチクリと痛んだ」とありますが、この時の博士の気持ちを説明したものとしてもっとも適当なものを次の中から選んで、

記号で答えなさい。

自分のせいでサンペイ君がみんなから仲間はずれにされてしまったことに対して罪悪感を抱いている。

サンペイ君と一緒に仲間はずれにされていたのに自分だけが受けいれられたことを後ろめたく思っている。

ウ 女子にチョコレートをもらえた自分と違いサンペイ君は一つももらえていないことが気にかかっている。

工 サンペイ君の素晴らしさをみんなに伝える勇気を持てない自分に対して自己嫌悪の気持ちがつのっている。

福ちゃんや他のクラスメイトに理由もないまま無視をされ続けているサンペイ君を気の毒に思っている。

傍線部④「どことなく声がうわずっていた」とありますが、この様子から誰の、どのような気持ちが分かりますか、三十五字以内で

説明しなさい。

問六

間七 の中から選んで、記号で答えなさい。 傍線部⑤「サンペイ君はいつもそうだ」とありますが、サンペイ君はどのような人ですか。その説明としてもっとも適当なものを次

クラスメイトを避けて、自分が興味のあることを一人で追求する人物

クラスメイトを見下して、自分のからに閉じこもるかたくなな人物。

クラスメイトを選別して、好きな人とだけ関わろうとするわがままな人物。

ウ

クラスメイトを恐れるあまり、わざとふざけて無難な生活を送ろうとする人物。

クラスメイトを幼稚だと思い、大人とだけ関わろうとするかたよりのある人物

問八 傍線部⑥ 「博士はバケツを持って走り始めた」という行動からわかる博士の望んでいたことを五十字以内で説明しなさい。

<del>--- 7 -</del>

傍線部⑦「窓からの光が反射して、教室全体が一瞬、おひさまの金色にほーっと輝いた」とありますが、この表現の説明としてもっ

問九

ヌシを釣り上げたサンペイ君の本当の素晴らしさに担任の柿崎先生だけが気づいたことを示している。

- マンとり)上げこナンペイ書のは旨の素書ってここ里もの事奇に上ごけば気づとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ウ クラス全員にあったサンペイ君への陰湿で残虐な気持ちが洗い流されていくさまを比喩的に表現している。 絶対的権力をにぎっていた福ちゃんに代わりサンペイ君がクラスの中心になることを暗示している。

工 クラス全体から無視され続けていたハカセとサンペイ君の勝利が確定されたことを明快に語っている。

クラスの人々がサンペイ君とヌシに惹きつけられ、温かで満ち足りた時が流れていることを表している。

才

<u>8 —</u>

## 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

17/12/25 9:54

自分は制服を身にまとい、 耳を澄ませば、路傍の草むらから虫たちの声が聞こえてくるだろう。その光景の中で一人、皆さんはこんなふうに思ったかもしれない。 立ち止まって振り返ると、遠くに拡がる緑豊かな風景が眼に入ってきたりする。青空が広がっていたり、鳥がのびのびと飛んでいたりする。 人で登校する日もあるだろう。「自分はなぜこの学校に通っているのだろう。どうして勉強しなければならないのだろう」なんて思いながら。 その中で僕は生きている。 皆さんの学校までの道のりを歩いてくる。大抵は友達と一緒ににぎやかに歩いてくるのかもしれない。だが①遅刻して一 学校へ向かわなければならない。どうしてあの鳥のように、自由に生きられないのだろう」と。 けれども、 あの鳥と僕はどこか違う。鳥は、だれにも妨げられず自由に空を飛んでいる。しかし

根拠に触れている証しであり、③あらゆる未来の「種」を生み出す起点にほかならない。
い出してほしい。感じた覚えがきっとあるはず。②こうした感覚は大人になると失われてしまう。けれども実はこの感覚こそ、学ぶことの には家族も友達も、学校の先生たちもいるが、「自分一人でここに生きている」という感覚だ。知らないふりをしていてはいけない。よく思 自分と世界の関係が、 自分がこの世界にいるということがとても不思議な、 鳥が空を飛んでいるようにはぴったりと感じられない。ほんのわずかな、 ③あらゆる未来の 奇妙なことに思えてくるのだ。同時に強い孤独感が押し寄せてくる。 Α 自分ではどうしようもない宿命

その意味で人間は、 られている。 ことがないからだ。 鳥は、 おそらくこのことが、 本当に自由なのだろうか。 鳥は空を「空」とは呼ばず、 世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然 (=世界)」の中に生きてい 人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。 人間、とりわけ若い皆さんが ⑤世界と自分との間にズレを感じる理由だ。 私はそうではないと思う。 魚も水を「水」と名づけることはない。 鳥はいわば空の中に閉じこめられている。 人間がするようには自分の住む世界を対象として捉える 魚も同様で、 水の中に閉じこめ

それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。 えがたいズレを感じながら、 証しなのだが、見方を変えれば、 かなければならないということ。 重要なことは、このズレがあるからこそ、 (孤独ではあるけれども)自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。 ⑥その自由に閉じこめられているともいえなくはない。 В 人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えてい 森を切り拓き、 田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、 人間は、 自分が生きている世界と自分との間に越 人間が自由である

めに特に必要とされているのが学校ということになる。 ることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、 するには、数学がなければならない。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、空を飛べる。 したりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。 そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あ しかし現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ば を学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のた \_\_\_\_\_\_、言葉を知らなければならない。世界の仕組みを理解して記述 (『学ぶことの根拠』小林康夫の文章による) X を学ぶことが第一段階だとすれ

問 空欄ABCに入る言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

例えば イ ところで

ウ まず

工 つまり

オ

しかし

なものを次の中から選んで、記号で答えなさい 傍線部①「遅刻して一人で登校する日」は、 「皆さん」にとってどのような意味をもたらしていますか、その説明としてもっとも適当

遅刻してしまった自分を反省する機会。

問二

自分の周りに広がる世界のすばらしさに気づく機会。

普段見逃している自然の豊かさを再発見する機会。

ウ エ

空飛ぶ鳥と自分を比較してみる機会。

当たり前の日常を疑い直してみる機会

問三 傍線部②「こうした感覚」とはどのようなものですか。四十字以内で説明しなさい。

当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。 傍線部③「あらゆる未来の『種』を生み出す起点にほかならない」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっとも適

問四

この感覚を時折思い出すことで、つまらない大人にならないですむということ。

この感覚をそだてていくことで、未来の困難を排除できるようになるということ。

ウ この感覚を磨いていくことで、人より秀でた業績を残せるようになるということ。

この感覚を忘れないことで、人間の輝かしい歴史を作ることになるということ。

この感覚を大事にしていくことで、将来いろいろな可能性が広がるということ。

工

問五 本文中の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。 傍線部④「鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う」とありますが、では人間が自由だと言えるのはなぜでしょうか。

問六 る形で、本文中から適切な箇所を二十字以内で抜き出しなさい。 傍線部⑤「世界と自分との間にズレを感じる」とありますが、そのことがもたらす利点はどのようなことですか。「~こと」につなが

問七 説明しなさい。 傍線部⑥「その自由に閉じこめられている」とありますが、どういうことですか。そこにこめられている意味を考えて四十字以内で

問八 空欄X(二字)Y(十五字程度)に入る言葉を自分で考えて答えなさい。

問九 本文の趣旨としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

人間と動物の違いという問題を、自然の果たす役割と結びつけて幅広い読者に向けて説いている。

なぜ学校へいくのかという問題を、人間の持つ義務と結びつけて幼い読者に向けて説いている。

ウ 歴史は進歩するのかという問題を、学校の果たす役割と結びつけて経験豊かな読者に向けて説いている。

工 なぜ人間は学ぶのかという問題を、 人間だけが持つ自由と結びつけて若い読者に向けて説いている。

オ 自由とは何かという問題を、人間の築いてきた歴史と結びつけて全ての読者に向けて説いている。

① 環境が健やかな子どもの成長をハグクむ。次の①~⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

Ξ

他女はヨウキな性格で友人も多い。

2

セツジツな人々の訴えに耳を傾ける。

生活が始まったヤサキの出来事だった。

5 4 3

敵の攻撃にたえかねてコウサンをする。

[問題はここまでです。]

17/12/25 9:54

17/12/25 9:54

